

論文の内容の要旨

論文題目 遷延化するひきこもりのプロセスを探る —変容の契機と分岐点の検討

氏 名 花 嶋 裕 久

本研究は、ひきこもりを経験した当事者およびひきこもりの子をもつ親へのインタビューから、その長期にわたるプロセスにおいて親子それぞれがどのような体験をしているのかを明らかにし、ひきこもりの長期化の要因や変容の契機、改善の分岐点などを検討することを目的としたものである。

■ 第1部 研究の展望

ひきこもりとは、「様々な要因の結果として社会的参加を回避し、原則的には6ヵ月以上にわたって概ね家庭にとどまり続けている状態」を指す。ひきこもりの顕著な特徴を挙げるならばその期間が極めて長いことであり、近年ではその長期化が深刻な社会問題になっている。長期間に亘るがゆえにその実態や現象の全体像を把握することも困難である。当事者だけでなく、共に暮らす親の負担も大きい。多くの家庭では経済的に自立することが難しいひきこもりの子どもと同居生活を続けることになる。長年息子と共に暮らす親はどのような体験をしているのかを明らかにすることが検討課題として挙げた。また、当事者はどのようにソトの世界とつながりを取り戻すのか。ひきこもりからの回復・解消とはどのようなことか、当事者が就労を果たすプロセスを明らかにすることも課題として挙げた。

ひきこもりの先行研究を概観するといくつかの課題が見えてきた。まず、ひきこもりに関する研究の蓄積が少ない。実践報告や事例報告はあっても科学的な研究手法に則った実証的研究については質的研究・量的研究ともに少ない。いくつか見られる研究も援助者側の視点から検討されたものであり、当事者のデータに基づく研究は少ないといえる。以上

のことから本研究は、①ひきこもりの当事者及びその親が体験するプロセスを可視化するモデルを生成すること、②ひきこもり当事者に対する支援の効果を実証的に検証すること、③ひきこもりの長期化の要因と変容の契機を検討することを目的とした。

■ 第2部 息子の生き方を受け入れてゆくプロセス—親の視点

第2部では、ひきこもりの子をもつ夫婦にインタビュー調査を行い、息子と暮らす生活のなかで親がどのような体験をしているのかを明らかにした。10年以上の長期化したひきこもり家庭から得られたデータを分析していくなかで、ひきこもりを抱える親のプロセスは大きく四つの時期に分けられると考えられた。各時期は、①ひきこもりへの移行と事態の深刻化、②第三者の介入と危機的状況の克服、③親子関係の再構築と社会参加の見守り、④就労の後押しと働かない生き方の容認と名づけた。①の段階では、息子が学校でうまくいっていないなどの“異変や兆候”に親が気づかない、あるいは問題を軽視、静観、楽観視してしまうために事態が深刻になっていく様子が語られた。②の段階では、親が第三者に協力を求め、良き相談者に会うことで危機的状況を脱する糸口をつかむ様子が語られた。③の段階では、息子と適度な距離を探りながら新たな親子関係を築き、社会とのつながりを取り戻そうと動き始めた息子を見守る親の様子が語られた。④の段階では、思うように社会参加が進まない息子に対して親が就労の後押しをする様子や、厳しい就労の現実を知り息子の生き方を容認していく親の心情が語られた。

プロセスの初期には母親が孤独感を感じながら息子への対応に悩む様子が見られた。父親からは仕事中心で家庭を顧みなかったという子育てへの後悔と反省が語られた。また、どの時期であっても経済的な悩みがついてまわる様子が伺えた。努力しても就職は厳しく親は息子の生き方を容認するが、「働けないから仕方ない」といったものから「本人が満足するならそれでいい」といったものまで、息子の生き方を容認する程度には個人差・温度差があることが示された。

■ 第3部 家を出て就労を果たしてゆくプロセス—当事者の視点

第3部では、ひきこもりを経験し就労を果たした当事者にインタビューを行い、当事者が過渡的中間施設である居場所に通いながら就労を果たしてゆくプロセスを検討した。ひきこもりの青年がいきなり社会復帰することは難しく、居場所を利用しながら社会との接点を取り戻してゆくことが順当なステップと考えられている。しかし、居場所に滞留してしまい、その利用期間の長期化が問題視されることも少なくない。そこで第3部では、ひきこもりの若者が家から出て、居場所を利用しながら就労を果たすまでのプロセスを当事者の視点から記述し、その全体像を見通せるモデルを作成した。居場所から就労を果たすまでの直線的な最短経路を明らかにし、一方で居場所と社会を行きつ戻りつすることで居場所に留まってしまいう循環的な経路を見出した。直線的な経路を順調に歩んで就労を果たす当事者はほとんどいない。居場所の人間関係で行き詰ったり、ソトの世界の人間関係で

傷つき居場所に戻ってきたりと、循環的な経路を辿ることで居場所利用が長期化してしまう。当事者の語りから居場所体験の全体像を可視化するモデルを作成し、長期化の理由を視覚的にも説明できるようにしたことは本研究の意義の一つと考えている。

■ 第4部 当事者に対する居場所支援の効果の検証

第4部ではまず、ひきこもりの若者が居場所に通い続けるなかでどのような変化があるのかということについて、利用者であるメンバーの自己評価によって明らかにしようと試みた。その結果、比較的短期間のうちにメンバーのソーシャルスキルが高まることが明らかになった。また、ソーシャルスキルの高まりは基本的信頼感の上昇と対人恐怖心性の減少と相関があることが示された。また、ソーシャルスキルの変化のピークはメンバーが居場所を利用し始めてから概ね2年程度に期間に生じ、その後は緩やかな変化していくことが示された。但し、変化の期間には個人差があり、長い期間居場所を利用する中で緩やかに変化していくメンバーもいると考えられた。このように居場所を利用するなかで生じるメンバーの変化について、メンバー自身の評価によってそれを実証したといえる。

さらに、ひきこもりの若者が居場所に通い続けるなかでどのような変化があるのかということについて、普段メンバーと関わっているスタッフの評価を用いて明らかにしようと試みた。メンバーは居場所に足を運ぶだけで自然と取り組みの枠ができ、乱れた生活習慣が次第に好転していく。対人関係ではとくに会話面での改善がみられ、多弁でグループの雰囲気を乱してしまっていたメンバーもその場に相応しくない話題を自分から避けられるようになるなど、状況判断が身についてくる。また、特定のスタッフとばかり話していたメンバーもやがて他のメンバーと必要に応じてつきあうことができるようになる。但し、他のメンバーとの交流がクラブ内にとどまるのかクラブ外にまで広がるのかについては個人差がみられた。

メンバーの自己評価とスタッフの評価を突き合わせてみたとき、共通する部分を集約すると「コミュニケーションスキル」と「対人関係」が向上しているということである。この2点に関してはメンバーとスタッフの双方が変化を実感しているといえ、量的研究でその変化を実証できたことは本研究の意義の一つと考えている。

■ 第5部 総合考察

これまでの結果から、ひきこもりのプロセスにおける変容の契機や分岐点を検討した。親の対応の変化、本人の成熟、相談相手の協力、雇用者の受け入れなど、長期のプロセスにおいては事態の改善につながる契機や分岐点が複数見出された。ひきこもりに至る要因が単一ではなく複合的であるように、ひきこもりから回復につながる要因もまた複合的であるといえる。ひきこもりの解決に近道や特効薬はないが、本研究で見出された変容の契機や分岐点において、本人と家族が地道に取り組み前進していくことで、ひきこもりの慢性化・長期化が抑制される可能性はある。また支援者は、当事者にも家族にもそれぞれの

段階で直面する課題があることを知り、家族がそれらの困難を乗り越えるプロセスに粘り強く伴走してゆくことが求められる。さらには社会や雇用者が、ひきこもりというイレギュラーな人生を歩んできた若者に対して門戸を開き、受け入れる土壌を整備してゆくことが必須である。ひきこもりという社会問題には多方面から支援のアプローチが必要だということにより多くの人が認識することが重要だと考えられる。

本研究の限界と今後の課題 インフォーマントの少なさと偏りによる一般化の問題がある。例えば、本研究の調査協力者となった当事者はみな高校卒業以上の教育歴があり、仕事に就いた時点での年齢は20～30歳台である。したがって、教育歴が義務教育以下の者や、40歳台以上（あるいは10歳台）で仕事に就こうとする者が、どれだけ就労を果たしているのかということは検討できていない。また、調査対象のZクラブは都市圏に所在しており、就労に関しては地方の中間施設よりも有利であることが考えられる。また、会費を払ってZクラブに通い続けられるだけ経済状況にある家庭を対象にしていることを考慮する必要がある。さらに、本研究はひきこもりという長期のプロセスの全てを扱ったものではない。当事者が50代、60代になったとき、あるいは両親が亡くなった後のプロセスを検証していくことは今後の課題となるだろう。